

博士学位論文審査要旨

2023年1月6日

論文題目： 古代日本語における漢字の意味用法の受容
——漢文訓読語への影響を中心に——

学位申請者： 胡 鴻洋

審査委員：

主査：	文学研究科	教授	藤井 俊博
副査：	日本語・日本文化教育センター	教授	李 長波
副査：	文学部	准教授	山本 佐和子

要 旨：

本論文は、漢字文化圏にある日本において、漢字の意味用法が漢文訓読を通じてどのように日本語に受容されたかについて追究しようとしたものである。

第一章では、和語の意味研究に漢字の意味用法の影響を加味すべきことを述べている。漢字の意味の影響については、これまで一部の研究に試みたものはあるが、本格的にはなされていない点に問題を見出そうとしている。

第二章では、漢文の「即」と比較し、訓読語「すなはち」に「継起関係」「即時発生」「原因理由」の用法が受け継がれていることを指摘し、仏典や変体漢文の影響など漢文の位相の異なりも踏まえつつ、細かく影響関係を指摘している。

第三章では、漢文の「偏」が和語「ひとへに」で訓読され、「もっぱらその状態である」意味を中心に定着したことを述べている。個別の作品では、『源氏物語』で「もっぱらその行為に徹する様」の用法は、『白氏文集』の「偏」から影響を受けたものであることを指摘するなど、個別作品の表現形成の問題として興味深い指摘を含む。

第四章では、「あへて～ず」をとりあげ、否定強調を表す用法は漢文に見られないが、『日本書紀』で否定強調に解される場合があることを指摘する。それを受け、和文や和漢混淆文では日本独自の傾向として否定強調用法が定着した過程を検討する。

第五章では、「塞」の訓読に用いられる「ふさぐ」「ふたぐ」が、同義語の二形対立語として各々漢文訓読語、和文語であるという説に対し、訓点資料・和文の例を細かく分析し、二語は同義ではなく、各々「満たして閉ざす」「遮る」意味であり、文脈に応じて使い分けられたことを詳細に明らかにしている。また、平安後期から鎌倉期の和漢混淆文において「ふさぐ」が主流になると、「ふたぐ」が例外的な和文的用法として残ったことまでを論証している。

第六章では、「設」の影響を受けた「まく」「まうく」を考察した。和語としては「具体物を移動できる状態に用意する」意味であったが、「設」の影響で「設置する」「敷く」「並べる」「施す」などの意味を受容していることを指摘する。和文でも文体的に漢文訓読語が用いられやすい人物の会話に用いる点など細かく指摘しており、特に「敷く」「施す」などが和漢混淆文を特徴付ける用法であることを指摘している。

本論文の扱った語は、五語のみでいまだ少なく、訓読語による漢字の意味の受容の一端を示したに止まる面はある。しかし、和語の意味の中に、漢字の意味の影響を受けた面が少ないことを具体的に示した点は高く評価される。和語の語義研究においては、漢字の影響を念頭におい

て本格的に追究したものはいまだ少なく、今後の研究すべき大きな課題を提示した点は評価に値しよう。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2023年1月6日

論文題目： 古代日本語における漢字の意味用法の受容
——漢文訓読語への影響を中心に——

学位申請者： 胡 鴻洋

審査委員：

主査：	文学研究科	教授	藤井 俊博
副査：	日本語・日本文化教育センター	教授	李 長波
副査：	文学部	准教授	山本 佐和子

要 旨：

2023年1月6日16時より約2時間にわたって試問を行った。試問では、論文の内容について専門知識を踏まえ、自らの研究内容についての的確に応答した。外国語（英語）については、口頭試問に引き続き、本論文の内容に関わる形で語学試験を行い、十分な学力があることが確認された。よって総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

Abstract of Doctoral Dissertation

論文題目： 古代日本語における漢字の意味用法の受容
Title of Doctoral Dissertation —漢文訓読語への影響を中心に—

氏名： 胡 鴻洋
Name

要旨：
Abstract

古代日本人は、音読、あるいは、訓読を通して漢字漢文を理解していた。したがって、漢字の意味用法は、字音語、または、漢文訓読語の形で日本語に入って、定着した。本研究では、「スナハチ」「ヒトヘニ」「アヘテ」「フサグ」「マウク」という五語を取り上げ、各語の意味用法と被訓字である「即」「偏」「敢」「塞」「設」の意味用法との継承関係を検討することで、漢字の意味用法が訓読を通して日本語に入って定着した実態を明らかにするものである。

第一章では、漢文訓読の研究を、東アジア漢字文化圏の問題として捉えようとする背景を受けて、古代日本語における漢字の意味用法の受容実態を研究する必要性を提示した。さらに、漢文訓読語に関する用語を整理し、本研究における漢文訓読語を定義づけた。また、先学の研究をまとめ、本研究の位置づけを述べた。

第二章では、時間量の短さを表す時間副詞「スナハチ」が漢文の「即」の意味用法をどのように受け継いだかを考察した。時間副詞「スナハチ」は漢文の「即」から「即時発生」の用法、「継起関係」の用法、「原因条件」の用法という「即」の三用法をすべて継承した。和文、和漢混淆文は漢文の「即」の三用法をすべて継承し、「継起関係」の用法を最も多く用いた点で共通している。一方、和文では、「即時発生」の用法は「原因条件」の用法より多く用いられたが、類型的な文脈に用いられる限定がある。それに対して、「原因条件」の用法は平安和文で男性作者が想定される作品、あるいは男性の口調を取り入れる女性作者が想定される作品に用いられた。和漢混淆文では、「即時発生」の用法は『今昔物語集』の天竺震旦部のみ用いられている。「原因条件」の用法は仏典の影響を受け、『今昔物語集』で「即時発生」の用法より多く使用されており、和漢混淆文に定着したことが推測された。

第三章では、『源氏物語』など和文に多く見られる副詞「ヒトヘニ」の語性を考察した。『角川古語大辞典』に従い、「ヒトヘニ」の用法を「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」という三用法に分けて、訓点資料、平安和文、和漢混淆文の「ヒトヘニ」の用法を考察した。結果として、訓点資料の「ヒトヘニ」は、「もっぱらその行為に徹する様」「もっぱらその状態である様」「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の三用法のいずれにも例が見られ、和文や和漢混淆文の用法の源になっていると思われる。平安和文では、「事の原因や目的がもっぱらそれに拠っている様」の用法に解される「ヒトヘニ」の例が見られない。「もっぱらその行為に徹する様」の用法に解される「ヒトヘニ」は全用例の83%を占めており、「心理・感情に関する動詞」を修飾する傾向が見られる。その裏に心理・感情に関する動詞を後接しやすい『白氏文集』の「偏」の影響が推測された。「もっぱらその状態である様」の用法に解される「ヒトヘニ」は、動詞、形容詞、形容動詞を修飾し、全用例の17%を占めている。和漢混淆文では、「もっぱらその行為に徹する様」の用法に解される「ヒトヘニ」は、全用例の44%を占めており、主に「複数の対象の中からある対象に限定して動作を実施する」文脈で用いられた。「もっぱらその状態である様」の用法と見られる「ヒトヘニ」は動詞、形容詞、名詞を修飾し、用例数は平安時代より多くなり、全用例の42%に上っている。「事

の原因や目的がもつぱらそれに拠っている様」の用法に解釈される「ヒトヘニ」は名詞と動詞を修飾し、全用例の14%を占めている。この用法は仏典によく見られる「偏依」「偏～故」「偏為」のような用語の直訳の影響を受けていると推測された。「ヒトヘニ」は、『白氏文集』など漢詩文に由来し、和文に広く用いられた語であることを指摘した。

第四章では、打消表現を伴って用いられる、副詞「アヘテ」の否定強調用法がどのように発生、定着したかを考察した。第一節では、漢文における「敢」の「意志用法」「可能用法」「謙遜用法」「反語用法」をもとに、『日本書紀』における漢字「敢」の用法を整理した。その結果として、『日本書紀』では、明確な否定強調用法に解される、否定辞を上接する「敢」の例は見出されないが、読下文では、意志用法で用いられた、否定辞を上接する漢文の「敢」の例を否定意志で訓読した「アヘテ～ジ/マシジ/ナケム」の例では、「アヘテ」の部分は単なる否定強調用法と解されやすいことを指摘した。第二節では、和文、和漢混淆文における「アヘテ」の意味用法の使用実態を考察した。上代の状況と比べ、中古・中世の和文や和漢混淆文では、「アヘテ」の例が多くなり、かつ打消表現を伴って用いられた否定強調用法が定着していくことが窺える。「アヘテ」のかかる打消表現の種類について、和文に「動詞未然形+助動詞ズ」「実質名詞+形容詞ナシ」しか見られないが、和漢混淆文に「名詞+ニアラズ」「動詞未然形+助動詞ジ/マジ」も見られ、これらはいずれも漢文訓読の影響であると推測された。打消表現を伴って用いられる「アヘテ」の否定強調を表す陳述副詞の用法は中国の漢文に見られないが、訓点資料や変体漢文に見られるため、和漢混淆文を考察する指標と扱うことができると指摘した。

第五章では、文体上、一見、二形対立のような分布を見せている動詞「フサグ」「フタグ」の意味用法に同義性が認められるかを考察した。平安時代の訓点資料では、「フサグ」は〈穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉〈モノ・ヒトを食い止める〉〈心をいっぱいにする〉の意、「フタグ」は〈あるものを何かで覆って遮る〉の意で用いられた。これに対して、和文では、「フサグ」の例がなく、「フタグ」の例は〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉という二つの意で用いられた。同じ訓点資料の中で、「フサグ」「フタグ」が併用される例があるが、「フサグ」は〈穴や通路などを満たして閉ざす、特に、部屋の通路である扉や視線の通路である目蓋を閉ざす〉〈モノ・ヒトを食い止める〉の意、「フタグ」は〈あるものを何かで覆って遮る〉の意に解され、意味用法の使い分けがされたことが確認できた。和漢混淆文では、「フサグ」は訓点資料に見られた意味を踏襲しつつ、「フタグ」の〈あるものを何かで覆って遮る〉〈占める〉の意味をも担うようになり、意味の広がりが見られる。これらの考察結果に基づき、「フサグ」「フタグ」のように、資料の性格にこだわらず、意味用法が異なる両語がそれぞれ訓点資料、平安和文に多く用いられたのは文体差でなく、意味用法の差のためであると推測された。

第六章では、動詞「マウク」が漢文の「設」の意味用法をどのように受け継いだかを考察した。「マウク」の九つの意味のなかで、〈設置する〉〈敷く〉〈並べる〉〈施す〉という四つの意味は、漢文「設」由来するものである。そのうちに、〈設置する〉〈並べる〉の意は、和漢混淆文のみならず、平安和文にも例が見られ、漢文訓読的な言葉遣いをしそうな人物に用いられており、和文に導入された漢文訓読的な意味用法であると指摘した。〈敷く〉〈施す〉の意は、平安和文に例がなく、和漢混淆文のみに例が現われ、〈設置する〉〈並べる〉の意と比べ、より本格的な漢文訓読的な意味用法であると指摘した。

第七章では、古代日本語における漢字の意味用法の受容実態をまとめた。すなわち、①漢字の字義は、和文、和漢混淆文の両方に限定的に受容された場合（「設」→「マウク」）、②漢字の字義は、和文、和漢混淆文の両方に高く受容された場合（「偏」→「ヒトヘニ」）、③漢字の字義は、和文に限定的に受容されたが、和漢混淆文に高く受容された場合（「即」→「スナハチ」）、④漢字の字義は本来の意味から多少離れており、和文に限定的に受容されたが、和漢混淆文に深く受容された場合（「敢」→「アヘテ」）、⑤漢字の字義は、和文にまったく受容されなかったが、変容して

和漢混淆文に受容された場合（「塞」→「フサグ」）という五つの場合があることを指摘した。

漢文訓読語とその被訓字である漢字の意味用法の継承関係を検討し、漢文訓読語の意味用法は被訓字の漢字からそのまま継承したものか、漢文訓読の場で新たに生じたものか、上代の古語から受け継いだものかを明らかにすることで、漢文訓読語全体の性格の解明に意義があることを述べた。このように、古代日本語における漢字の意味用法の受容実態を明らかにすることは、表意文字としての漢字の意味用法は漢文訓読を通して、どのように中国からその周辺諸国へ浸透したか、さらに、東アジア漢字文化圏の史実像をどのように把握するかという大きな課題の解明に意義があると考えられる。